

大阪芸術大学キャンパスにおける 芸術空間構成の実践及びその研究

研究年度・期間：平成15年度

研究ディレクター：菅原 二郎
(美術学科 教授)

共同研究者：中島 貞夫 (映像学科 教授) 狩野 忠正 (環境デザイン学科 教授) 田村 昭彦 (デザイン学科 教授) 伊藤 隆 (工芸学科 教授) 坪田 政彦 (美術学科 教授)

小田 信夫 (美術学科 教授) 加藤 隆明 (芸術計画学科 講師) 山中 俊広 (博物館 学芸員)

研究助言者：藤井 孝宏
(芸術計画学科 非常勤講師)

芸術研究所共同研究 大阪芸術大学キャンパスにおける芸術空間構成の実践およびその研究の活動である「アートステージ74」を2003年10月8日から10月25日まで大阪芸術大学キャンパスで開催した。

この活動は、私達のキャンパスをより魅力的な空間にしていくには、そして私達教員を含め学生たちの活力を、審美眼を、そして作品の質を高めていくには、という問題を考えるために、2000年にシミュレーションを主体としたアートステージ25、2001年に開催したアートステージ37、に続く3回目の活動となる。

3回目を迎えた今回は、前回の倍となる74の個人、グループからの参加があった。これは前回に比べて参加者が倍増した事になったが、個々の研究課題の膨らみも比例するかと思われたその予想はあまりにも楽観的であった。今回の参加を学科別に列記してみると、美術、デザイン、工芸、舞台芸術、環境デザイン、芸術計画、文芸、音楽の各学科のほかにも大学院芸術制作研究科、職員の方々である。

又前回に引続き芸術計画学科の藤井孝宏先生にアンケート調査をお願いした。今回のアンケートでは総合芸術大学で学ぶ学生のアートステージ74に対する学生の意識を調査して「芸大キャンパスの中での空間構成」の捉え方に学科間の違いや学年間の違いがあるかどうかを調べることを目的とされた。アートステージ74のような催しは企画、実行、後始末まで芸術計画学科が関わるべき事柄が多く、情報処理の面でも非常に良質で、生きた素材であると考えられたようである。

アートステージ74の開催中にキャンパストーク、講演会、ワークショップ等の関連イベントがおこなわれた。

キャンパストークは3回にわたり昼休みの時間にA, B, C,の各ゾーンで行われ、約150人余りの参加者があった。それは出品者が自らの制作意図を述べるだけでなく、その他多数の観客にもアートステージを楽しみ、かつ芸術そのものの理解の助けとなることを目指した。各ゾー

ンは事前にその性格を設定し展示前と展示中の空間の変化等について参加者と討議した。

講演会は環境のデザイン学科の協力のもと、外部よりライフスタイルプロデューサー浜野康弘氏を招き第一食堂前の芝生で行われ、都市、建築、環境、デザインと広範囲にわたる話をされた。それは浜野氏が今までに手がけられた仕事を通し、さまざまな問題を乗り越えて来られた経験を中心に話され、その上で地球環境を変えていくのは我々一人一人が取り組んでいくべきことだ、と熱っぽく語られていた。

ワークショップは「子供が撮ったキャンパスとアート」というタイトルのもと、デジタルカメラで子供の視点から作品を撮ってもらい、その場でプリントし、会期中展示するという方法をとった。児童たちは大阪芸術大学近隣の河南町立石川小学校から52名を招き、5人ずつほどの小グループに分かれ、各グループにアートサポーターとして学生についてもらった。彼らにはグループの統括、作品の説明や鑑賞、体験することにより生まれてくる感覚や思いを言葉にしてもらい、児童が自由に作品と接してもらい環境作りをしてもらった。同時に撮影補助、児童の危険回避にもあたってもらった。

プリントされた写真を通し、児童が作品を前にして彼らの興味の対象が何であったのかが良く分かるものがあり、写真で世界を切り取るということが理解できるものなどがあつた。

これまで2回のアートステージと今回のそれとは参加人数の倍増だけでなく、明らかに違う展開となった。このあたりの状況を大阪市立美術館建設準備室学芸員菅谷富夫氏の文章から引用させて頂くと；

会期中のキャンパスの賑わいは学園祭を連想させるものであつた。前回のアートステージには無かつたこの賑わいが、何を意味しているのかを考えてみたい。そのことが今回のプロジェクトの性格、意義、問題点をより鮮明にしてくれると思うからである。

一般に学園祭ではたくさんの立看板や装飾が立ち並び、キャンパスはいつもと違うお祭りの雰囲気包まれる。それらの看板類や模擬店は学生が間に合わせでつくるもので、ハリボテで安っぽいものであるし、それゆえ一層、ひと時のハレの場としての情景をつくりだすともいえる。それとよく似た印象を、私は今回のアートステージから受けたのである。

出品者である教員、職員、大学院生の作品としては完成度の低いものがいくつかあつたのは事実であろう。このような作品には2つのタイプがあつたように思える。ひとつは参加することの意義だけに終わってしまい、展示する空間と芸術作品との関係を考えて今回のプロジェクトに対してその姿勢が疑われるようなタイプの作品。

もうひとつは空間と芸術作品の関係の捉え方が今までの参加者とは異なるタイプの作家または作品である。結果としてどちらも学園祭的安っぽさを持つことになってしまったが、それぞれが孕んでいる意味には大きな違いがある。

前者の場合、つまり学生と授業の一環で制作したかに見える作品などでは、その作品自体に力を感じないため、なぜキャンパスの公共空間に持ち出されているのか理解できないことにな

っている。したがって、その場を異化することも活性化することもできておらず、このプロジェクトの目標は達成されていない。学園祭にありがちな中途半端な「授業成果の発表」スタイルに止まっているのである。その場所に置いてみて分かったというより、作品の力の無さは当初から分かっているのであるから、これらの作品はこの研究プロジェクトの意義を失わせるものにしかっていないのである。

後者の例は、環境デザインの視点から制作された作品にその傾向が多く見られたように思う。制作された作品が既にありそれに相応しい場所を学内に探すというのではなく、まず場所を決めそれに相応しい作品を制作する、作品アイデアは事前にあったとしても場所との関係で作品に変更や訂正を加えて完成させるのである。ここには従来の制作者中心の作品と展示場所の関係とは違う別の関係が存在している。今までの関係が作家、作品、場所の順で構想されていたとしたら、ここでは場所、作家、作品の順番なのである。

しかしその場合、展示場所での制作が中心となるため、現場での作業が単なる設置という以上の時間が必要になる。今回の展示を見た限りではどうも制作時間不足の感が否めない。したがって出品された作品は安っぽい出来で、やはり作品自体の力が不足しているように思う。もっとも、それがアイデアの不足なのか展示された制作物の出来具合の不備なのか的確に指摘することは難しい。ただ、作品に力が不足している以上、結果としてこの手の作品は今回の展示プロジェクトのなかで成功例とは言えないであろう。

賑わい、それも「学園祭的」賑わいは、今までには無かった力不足の2つのタイプの作品群が展示されることで生まれてきたわけであるが、そこで提示された問題、特に後者の例は単に失敗例のひとつとして済ます訳には行かないものである。

ここには、いわば芸術作品や展示方法という大きな枠組みに対する認識の違いが明らかになっているのである。

しかし作品の完成度や展示というもののありかたに疑問を持って制作している作品があるとしたら、それは同一空間(大阪芸術大学キャンパス)にどのように併存していくのであろうか。そしてそれはこのような展示の度に議論になっていくであろう。

実際、大阪芸術大学には、いくつもの芸術観や芸術思潮が存在している。それはむしろ当然で歓迎すべきことであり、この大学の健全さを表わすことでもある。

この展示・研究プロジェクトは様々な芸術観をどのように並列していくのか、それはどのような枠組みなら可能なのか、そんなことを考えさせてくれた。

今回のアートステージに問題があるとすれば、その枠組みが十分な大きさとかたちを取っていたかということであろう。それは同時に、芸術教育の現場である大阪芸術大学という枠組みが、今後どのように存在していくべきかをも示唆しているように思える。

前回までは美術系の学科(美術学科、工芸学科)の参加が主流という印象を持ったが今回は環境デザイン学科、芸術計画学科、デザイン学科等の非美術系の参加が特に多く、それ等を通

して改めて各分野、学科によってのものの考え方、価値観の違いを実感した。又その違いは制作に関わる時間、制作場所の問題にも関わっているように思えた。

今回の発表活動は菅谷氏、山中氏も指摘しているように過去2回の活動と明らかに異なる、我々の予想していなかったような展開となり、改めて学科によって前述のこの活動の目的を覆させるような認識の違いを感じた。

それはキャンパス空間での発表ということの大前提として前回までのアートステージの参加者間では暗黙の了解事項として共通に認識されてきた公共性、パブリック性の認識、理解が今回の参加者には浸透していなかったことである。

つまり多くの学科、大学院生たちに呼びかける以上暗黙の了解事項などは存在できないということである。

それは公共の空間と、画廊、美術館での発表の違い、意識の違いについて時間をかけて参加者たちと討議していくべきであり、それにはもっと長い準備期間、議論できる絶対的な時間が必要であるという大きな反省点を得ることが出来た。(菅原二郎記)

大阪芸術大学芸術研究所 共同研究グループ [大阪芸術大学キャンパスにおける芸術空間構成の実践及びその研究] の報告集が出来あがり学院本部、大阪芸術大学の事務所の各課、大学院事務所、14学科の各研究室に配布すると共に各参加者達に配布した。

また学外には全国の芸術系大学(附属美術館・博物館含む)66件、関西の美術館 36件、関西の主要画廊 28件、芸大受験者数上位の高等学校10校 10件の計140件にも送付したことを報告致します。